

元朝における中峰明本とその道俗

西 尾 賢 隆

はじめに

私達は中国仏教といえはすぐに隋唐の仏教を想起する。後漢以後、絶え間なくシルク・ロード、あるいは南海ルートを経由して伝えられた夥しい仏教は、すべて仏陀によって説かれた教えとして受け取られた。しかし經典相互の間には矛盾もみられるところから、できるだけ矛盾をなくするように整理体系化が図られた。いわゆる教相判釈であり、『華嚴經』を中心として体系付けるのが華嚴宗であり、『法華經』を中心として体系付けるのが天台宗である。このような教学的仏教が隋唐時代に展開し得たのは、隋唐という国が国際的な世界帝国としての性格をもつところからきている。ところが安史の乱以後、国粹的な方向へと唐朝の性格が変革していった。それを象徴的に現すのが会昌の廃仏で、夷狄の教えである仏教は徹底した弾圧を被った。その弾圧からしばらく生き残って、廃仏以前よりもより一層社会に定着したのが禪宗であり、その結果、中国の禪宗といえは、五家七宗といわれる程に繁栄することになる。その五家七宗の時代は、正しく唐宋変革期に相当する。

いまここに取り上げようとする中峰明本は、元代を代表する禪僧といっても過言ではない。従来、中国禪宗史とい

えば、唐が中心であり、せいぜい宋代まででこと足りるとする気風が強かった。それは柴西や道元や南浦紹明らによって中国の禪が日本に移植され終ったところからきており、その結果、元以後の禪宗については殆ど顧みられないのが実情である。現今のわが国の禪宗教団という枠組のみからその淵源を過去に遡及するという研究方法では、その時代その時代の流れを把握することはできない。中世には中世の、近世には近世の流れを掴む必要がある。そうなるって初めて総体としての禪宗史が把握されることになる。わが国に伝えられた禪は二十四流四十六伝とかいわれるこの点からいっても宋代で研究を打ち切ったのでは片手落ちといったことになる。この論考において究めようとする点は、中峰を当時の社会状況の中から探って見たいということである。その事が宋元明と続く中国禪宗史の中で、少しでも彼を位置付け得たならば幸いとするところである。

そこでまず、中峰の行状を社会の動きと関連付けながら見ることにする。

一 中峰の事績

中峰が生まれたのは南宋の景定四年（一二六三）の事で、賈似道の専権時代の事に属する。すでにモンゴルは金朝を滅ぼし、華北はその領有に帰し、南宋と境を接した。中国の征服王朝として君臨するモンゴルにとって江南に中国人の正統王朝が存在することは、中国の北半分を支配するとはいえず、華北の中国人（漢人）の心の拠所としての国家とはいえない。どうしてもモンゴルにとって南宋を征服する必要があった。クビライが南宋の守りの要である鄂州を攻囲中に、兄メンゲ・カーンが合州で亡くなり（一二五九）、残置軍の指揮を張柔に命じて北帰した。クビライはのちの上都でお手盛りのクリルタイを召集して、末弟のアリクブカの機先を制して即位し、アリクブカは遅れてアルタン河畔で即位することになった。モンゴルの勢力を二分する内乱も漢地を掌握するクビライの勝利に帰した。一年おいて海都の反乱が起り、これは成宗の大徳七年（一二三〇）になってようやく終結を見た。この二つの反乱はクビラ

イ・カーン国をいよいよもって中国の征服王朝として性格づけることになった。一方、鄂州の役以後、南宋では賈似道の強力なリーダー・シップによって、軍閥・官僚・宦官・外戚・学生を抑え、公田法・經界推排法を実施し、金銀見錢関子を発行した。賈似道の断乎とした政策の遂行は、南宋の小康状態をもたらした。しかし、襄陽の陥落は、いかな賈似道でも南宋の滅亡を食い止めることができなく、国都臨安もモンゴルの軍門に降ることになった(一二七六⁽¹⁾)。実質上、南宋の滅んだ景炎元年の歳には、中峰は十四歳になっていた。彼は杭州路錢塘県の人であるから、宋とモンゴル軍の戦闘を見ながら成長したわけではないが、臨安降伏の際にはモンゴル軍を見たことであろう。彼の出家を志すようになった動機は九歳で母を失ったことによる(『中峰広録』卷一八下、東語西話下)。出家しようとしたが、父親の許しが得られず、ようやく高峰原妙(一二三九—九五)によって師子院で薙髪したのは二十五歳(一二八七)のことであった。明年具足戒を受け、また明年流泉をみて悟るところがあり、高峰のもとに詣り証明を求めたところ打出された。そのころ民間でお上が少年少女を召し出しているというデマがとんだ。これを題材として中峰は次のように尋ねた。

師因に問うて曰く、忽し有る人來り、和尚に童男女を討ぬるを問う時如何と。高峰曰く、我但だ竹篋子を度し他に与うるのみと。師言下に洞然として、法源底に徹す(中峰行録)。

かくして、高峰は真讃を書き中峰に与え、修行者を中峰に師事させるように仕向けた⁽³⁾。

高峰は破庵派の法系に属し、呉江(江蘇省蘇州市呉江県)の人である。彼は雪岩祖欽(？—一二八七)の法を嗣いだのち、武康(浙江省湖州市武康)の双髻峰にいたとき、彼のもとにいた学徒がモンゴル兵を避けて四散してしまった。彼はただひとり閉門して坐禅をし自若としておったという(一二七六)。按堵すると再び修行者が集まり応接に暇もないくらいで、西天目山の師子岩に逃れた(一二七九)。ここに中峰が参禅したことになる。なお、雪岩は潭州の龍興寺に出世ののち、最後には甲刹⁽⁴⁾の一つ袁州の仰山に住した。

ある時、淮僧の子証が高峰に諸弟子の優劣を問うた。

高峰曰く、初院主等の若きは、一知半解にして全て無しと道わず。義首座の如きは、固より是れ根の老なる竹にして、其の七曲八曲の如し。惟だ本維那は却つて是れ竿上林の新篁にして、他日材を成すこと未だ量り易からずと（中峰行録）。

初院主の諱の一字目と字はわからないが、義首座とは断崖了義のことである。本維那はもちろん中峰明本をさす。竹の子がどう成長するかわからないくらい中峰もすぐれた才能をもつことを例えており、弟子の中で一番買っているようである。高峰に惚れ込み深く信仰していた松江（上海市松江県）の瞿霆発が田二百七十頃を寄付し、天目山の蓮華峰に大覚寺を建立したのは至元二八年（一二九一）のことであった。⁽⁶⁾ 高峰は遷化しようとしたとき大覚寺を中峰に委嘱しようとしたが、第一座（首座）の祖雍を推挙している（一二九五）。

高峰が亡くなり三年の喪があけて、ここに一人前の禅僧として活躍することになる。ちょうどこの時は、正しく世祖の禅宗抑圧策が終焉し、江南の禅僧の活躍がめだつ時期に際会した（竺沙雅章『中国仏教社会史研究』三〇一頁）。大徳元年（一二九七）に天目山を離れ皖山（潜山・皖公山ともいう。安徽省安慶地区潜山県西）に登り、廬山に遊び金陵に至った。皖公山は三祖僧璨が禅法を修めたところといわれ、廬山の大林寺は四祖道信の留まったところとして知られる。金陵では市中の禅寺に留錫したというよりも郊外の蔣山（紫金山）に留まったことであろう。大徳二年に湖州（浙江省湖州市）の弁山に菴居すると学者が幅濫し、拒んでもやって来るものはますます多くなった。大徳四年には菴を平江（江蘇省蘇州市呉県）の鴈蕩に結び、大衆が多く法席を成すにいたった。大徳六年（一二三〇）に瞿霆発は大覚寺に住持となるようかさねて要請しているが辞退している。この頃、呉興（浙江省湖州市）出身の趙孟頫は江浙等処儒学提挙として杭州に赴任しており、中峰に禅の心髓を問うと、中峰は情欲を防ぎ本性に返るという趣旨を説いた。趙孟頫は京師大都に呼び戻され翰林院に入ってから、使者を遣わし『金剛般若経』の大意を尋ね、それ

に対し中峰は略義一卷を著して答える（延祐三年七月のこと）という具合に交流が続いた。なお、趙孟頫は趙の姓からもわかるように、宋の王室の末裔である。

大徳八年天目山に帰った中峰は高峰の塔に草菴を結び、九年には師子院に住した。至大元年（一三〇八）東宮の仁宗は彼に法慧禪師という号を与え、程無く中峰は師子院の院事をやめて呉国に乞食し、二年儀真（江蘇省揚州市儀征県）に道を取り船居し、三年大衆の要請により天目山に還った。当時、僉浙西廉訪司事であった鄭雲翼は杭州におり、中峰に法を問うたところ、中峰は経世出世の学を究明して答えとなした。四年、中峰はまた呉江（江蘇省蘇州市呉江県）に船居し、陳子聡は順心菴を建て中峰を開山とした。長江を渡って小林寺に行こうと思ひ汁にまで至ると城隅の土屋を借りて住むことになる。ここには僧俗ともに争って見え中峰のことを江南の古仏といっている。皇慶元年（一三二二）菴を廬州六安山（安徽省霍西県西）に結んだ。十二月二十六日翟霆発が両浙運使で亡くなる。二年、帰ってその喪を弔うと、子の翟時学が宣政院の疏によって大覚寺に住するよう願ったが、中峰は首座定叟永泰を代りとした。また江浙行省丞相が中峰を私宅に呼び、五山第二の靈隠寺に住するよう懇請したが、これまた辞退した。⁽⁸⁾延祐三年（一三一六）春、仁宗は宣政院使を杭州に派遣し、江南の仏教界を整治しようとした。⁽⁹⁾そのとき院使が天目山に入り中峰を訪ねようとするのを聞いて出会うのを鎮江（江蘇省鎮江市）に避けている。四年、丹陽（江蘇省鎮江市丹陽県）の蔣均が大同菴を建立し中峰に居らせた。

延祐五年大衆の要請により天目山に還る。この年九月には仁宗から中峰の道行に対し仏慈円照広慧禪師の号を授けられ、あわせて金襴衣を賜ることになる。さらに仁宗は師子院に師子正宗禪寺と寺額を授け、趙孟頫に碑文を撰述させた。これより前、高麗藩王王璋が弟子の礼をとり、六年には念願かゝって入山をし草菴に見え心要を咨訣し、陞座普説を請うた。⁽¹⁰⁾中峰は王に法名を勝光、号を真際とつけている。至治二年（一三三二）行宣政院は五山第一の徑山（^{きんざん}）に住持させようとしたが晋山しなかった。天目山の北、中佳山で晩年を終ろうとしたが、僧俗ともに危険を顧みずやつ

てくることから、彼らの跋涉を気の毒に思つて草菴に帰った。十月には英宗から香と金襴衣とを賜与されている。このころ江浙行省平章の脱歓は法語を乞い、中書参知政事の敬儀も法を問うたことがあった。至治三年（一三二三）八月十四日、中峰は亡くなった。世寿六十一、僧臘三十七である。

以上、中峰の大まかな生涯を彼の自伝の部分（『中峰広録』巻一八下）と法弟祖順が泰定元年（一二三四）に記録した「中峰行録」（『中峰広録』巻三〇）とによって述べた。中峰にとって師というべき人はただ一人高峰のみである。これは当時の禅僧として稀有なことであり、普通には歴参といつて各地の禅僧に参禅した。彼が幻住菴を各地に結び世に出ようとはしない生き方を示した手本は高峰であつた。このように中峰と高峰との師弟関係には非常に密接なものがある。径山・靈隠という五山に住せず、徹底して菴居したことは、日本禅宗史の概念を借りれば、林下を貫いたということになる。中峰からいったら弟子に当る世代の笑隠大訢（一二八四—一三四四）は五山官寺派の頂点に立つ五山之上と位置付けられる龍翔寺の開山となつた。笑隠は官寺に緊縛されることに安住したわけではないが、中峰とは対照的な生き方をしたことになる。中峰は求めて貴顕と交渉をもつたわけではないが、彼のもとには多くの居士が蟄集した。あたかも元朝社会の縮図のようである。

そこで次に、「中峰行録」ではうかがえなかつた彼の弟子たちについて少しく見ることにする。

二 中峰の門下

中峰の入室の弟子は十数人といわれるが（『宋文憲公全集』巻四二、千岩元長塔銘）、中国人の法嗣として『増集続伝灯録』巻六、『統灯存稿』巻八、ともに天如惟則と千岩元長とをあげるにすぎない。

まず、天如惟則は世々廬陵永新（江西省吉安地区永新県）の人、名族譚氏の出である。天如は業を禾山に受け、法を中峰から得た。すると中峰は彼を強いて板首（前堂首座）に任じ、これより中峰はいつも、「堂中に首座有り、老

幻閑を偷む可し」(『増集続伝灯録』卷六、天如維則章)といったという。危素が至正九年(一三四九)に天台宗の沙門矩の求めによって書いた「天如禪師語錄序」(『天如惟則語錄』卷一)に次のようにいう。

昔中峰和尚、道を杭の天目山に倡え、學者雲集す。既に世を委つること三十年、能く其の付授の重を任い、其の責望の言を守り、光を藴^{くみ}し采を鏟^{けず}り、久しくして愈々章れ、傑然として独立する者は、吾が廬陵の天如則禪師なり。彼は実に中峰の期待に背かなかった。師の中峰が亡くなると、江浙の禪院の招聘を振り切つて、跡を呉淞(吳淞江)の間に晦ますこと十二年で、蘇州(江蘇省蘇州市)師子林に入った。寺は至正二年(一三四二)門人がお金を出しあつて土地を買い家屋を建てて天如を居らせたもので、寺名の菩提正宗は帝師から与えられたものである。また至正四年(一三五四)帝師は仏心普濟文慧大弁という禪師号と金襴衣を賜与した。生没年は不詳である。

次に、千岩元長(一二八四—一三五七)は越の蕭山県(浙江省杭州市蕭山県)許賢郷の人、代々学問をする家柄の出身である。たまたま行省の丞相が僧をお斎に招いた時、千岩は大衆と共に出かけ中峰もまた一座の中にいた。彼を見かけた中峰は日々の行ないはどうかと問いかけると、彼はただ念仏するだけですと答えた。すると中峰は仏は今どこにおられるかと問い、彼がためらうと、力一杯叱りつけた。かくて狗子無仏性の公案をもらうことになる。靈隠寺の山中で修行していると、雪庭□伝(四十九世)に召されて内記を掌らされている。開枕しようとしたとき、鼠が猫の食器を引繰りし地面に落ちわたれた音を聞いて恍然と開悟した。朝になるのをまって中峰のもとに出かけ印証を受けた。師の付嘱を受けると天龍の東庵に隠居し、禅味に耽悦し外縁と交渉をもたなかった。中天竺寺の笑隱大訢も、江浙行省丞相で宣政院使を兼任した脱猷も、千岩を出世させようとしたが、どちらの命も聴かず出世しなかった。かくして弟子の希昇と烏傷(浙江省金華地区義烏県)伏龍山に行き、大樹の下で留つたのは泰定四年(一三二七)の事であった。彼が至ると郷民は飲食を献じ、邑の大姓である楼如浚・楼一得は廃寺の聖寿寺を復興し彼を住させた。ここには国内はもとより日本・高麗・八番・羅甸・交趾・琉球からもやってきて、修行者はいつも数百人に達した。

天如や千岩が、法系の上から中峰の法嗣であることは、灯史により知られる。ところが、高峰の門流は官寺に出世することなく菴居し生涯を終え、その伝を後世に残さないものがいた。その中にあって幸いにも還庵道在（一二九三—？）は、克新撰『天池寂鑑禪院記』（『呉郡文粹統集』卷三三）に彼の名を見いだす。還庵は元末の至正一七年（一三五七）兵乱を避けて姑蘇（江蘇省蘇州市）華山寂鑑院に住することになった。彼は京口（江蘇省鎮江市）の人で、中峰について得度し、師事すること多年に及び、その堂奥に升ることになった。彼の至るところ人々はその教化になびき、武康の上柏（浙江省湖州市）、丹陽（江蘇省鎮江市丹陽県）の環谿に菴居した。堂奥に升ったということは、中峰の法を嗣いだとみてよいであろう。還庵のように中峰の法嗣となりながら灯史に欠落している禅僧はまだあったことであろう。

次に、中峰の法嗣とはなっていないが、彼に師事した禅家について、少しく見ていくことにする。

鎮関法枢（一二七八—一三四〇）は常州華藏寺に行き竺西妙坦について業を受け、初めて参禅したのが中峰であり、次に道場の及菴信につき、秀の石門の元翁信の法嗣となった。十五年間にわたり大衆の中に潜み、ようやく闔の天宝に出世したのは、延祐五年（一三一八）のことである（『続灯存稿』卷六、鎮関法枢章）。生涯にわたり不出世を貫いたわけではないが、長い聖胎長養は中峰の影響であろう。

笑隠大訢は中峰を天目山に訪ねた際、話が夜半に及び、大きな風が吹いてきて、崖の石が今にも砕けようとする程で、左右にいたものは辟易としていた。ところが笑隠の方は動ずる風もなく、中峰から非常に敬異されたといわれる（『金華黃文集』卷四二、笑隠塔銘）。

大道□平も天目山に往き、幻住すなわち中峰に謁見し心要を咨叩している。中峰から道氣があるのを見込まれて、杭の天龍寺を復興することになる（『始豊稿』卷七、龍山天龍寺記）。

無尽祖灯（一二九二—一三六九）は日溪□泳の法嗣となるが、中峰にも参じている（『宋學士文集』卷五、無尽行

業碑銘)。

一源永寧(一二九二—一三六九)は無用□寛の法嗣で、虚谷希陵・元叟行端そして中峰らにも参じている。とりわけ中峰は一源を買っている(『宋学士文集』卷三二、一源碑銘)。

無印大証(一二九七—一三六一)は雲外雲岫の法嗣で、中峰にも参じた(『続伝灯録』卷三六、無印章)。

傑峰世愚(一三〇一—一三七〇)は止岩□成の法嗣となる前、布衲祖雍・断崖了義・中峰が雪岩→高峰の道を開陳しているというのをきいて、彼らに咨叩したがかなわなかった(『宋学士文集』卷五五、傑峰碑銘)。

右に見た禅家は手っ取り早く知り得たものであるが、これ以外にも数多くの禅家が中峰に参禅したであろうことは想像に難くない。

次に中峰と居士については、さきに藤島建樹氏が「元朝仏教の一樣相—中峰明本をめぐる居士たち—」(『大谷学報』五七卷三号)で「中峰行録」によりつつ網羅的に研究されている。そこで、ここでは重複をさけて、より研究を深めることのできるもののみについて取り上げることにする。

三 中峰と居士

まず、瞿舜発はさきに見たように師の高峰との因縁から中峰も密接な交流をもつようになった。中峰は瞿舜発を再世の龐居士とし、龐居士のように家珍を水底に沈めるといふようなことはしなかったが、その家珍を転じて布施利益し種々の救援摂護といった方便を行なったと評価する。

都運相公、昔至元辛卯二月十九(日)に天目に登り先師を叩く。先師竹篋を握り問いて曰く、相公遊山の為に来たるか、仏法の為に来たるか。公答えて云く、仏法の為に来たる。先師竹篋を擲下して曰く、会すや。公云く、会せず。師曰く。虎穴に入らずんば、争でか虎子を得ん(『中峰広録』卷二、瞿運使舜発卒哭薬師道場対霊小参)。

瞿癡発は高峰により仏法の方に誘われた。彼の字は声父、琴軒居士といった。祖先は汴の人であったが、宋の南渡するに從い下沙（上海市）に住むようになった。元兵が臨安に宿營し遊騎が境に及ぶと、歳二十六の彼は多くの民を率いて投降し郷土を守った。当然これは臨安陥落の事とすると、彼の生年は淳祐十一年（一二五二）ということになり、六十二歳（皇慶元年、一三二二）で亡くなったことになる。彼は下沙塩場副使・同提舉上海市舶・兩浙運司副使・兩浙都轉運塩使に任ぜられた。兩浙都轉運塩使司は江浙行省下の特設官庁で塩課の事を掌り、塩場は三十四か所を管理し、その一つが下沙場である。

さきにみたように、瞿癡発は田二七〇頃を高峰に寄付している。これは「中峰行録」に基づいているが、高峰の「行状」では巨莊を施したことになる。いま『遂昌雜錄』を見ると次のようにいう。

瞿（癡発）田を寺中に捐えんと欲し、寺僧一人を挟み下沙に還り、田若干頃を以て之に歸す。歸るの日、僧田券を以て師に呈す。師大いに怒り、叱りて速かに瞿に還さしむ。之に語けて曰く、平常山中に田無く、苦苦や過了。今日田を得て業を造さんと欲するや。僧下沙に至り、券を以て瞿に還す。瞿曰く、僧輩無識と謂う可し。此等の細事、何ぞ必ずしも老僧をして知らしめんや。後天目山に為て大覺師子院を建つ。

最後の大覺師子院とあるのは大覺寺、もしくは大覺正等寺とすべきところである。趙孟頫が勅命により撰述した「天目山大覺正等禪寺記」（『松雪齋詩文外集』所収）に、

至元辛卯、故兩浙運使瞿癡発、師の道望に嚮き、師を師子岩の死関に謁す。仰いで玄音を扣き、心に神悟を領じ、恍として宿契の若し。禪衲の至るも容るる所無きを歎じて、慨然として建寺の志有り。迺ち鉅莊先後凡そ二百頃有畸を割き、及び山田若干を買ひ、其の歳入に指し、首めて梵宇を創す。

とある。これらの史料を勘案すると、瞿癡発は高峰のために大覺寺を開創するのに二七〇頃（もしくは二〇〇頃あまり）の田を費用にあて、寺の日用の資にあてるのに若干頃を寄付したことになる。

ところが、同じく趙孟頫の撰になる「敕建西天目山獅子正宗禪寺碑記」(『西天目祖山志』卷四。四部叢刊本の文集にはこの碑記なし)の中に、「辛卯、運使臣瞿霆堯、大田を施すも納れられず、山田二頃を買い、以て日用に資す。明年蓮華峰に大覺正等禪寺を卜す」とある。これからすると、二七〇頃の田の寄付を辞退したことになる。しかし現に大覺寺は建立されたわけだから、高峰の意に順着せず、寺の建立が遂行されたのであろう。

ところで、二頃にしる、二七〇頃にしる、あまりイメージが浮かばないが、当時の人民はどれくらいの田で生計を営んでいたのでしょうか。よく引用されるものではあるが、南宋末元初の方回の『古今攷』卷一八、附論班古計井田百畝歲入歲出に次のようにいう。

後世田買売することを得たり。富者は数万石の租、小は万石・五千石、大は十万石・二十万石、是を富民と為す。驟かに盛んなるも忽ちに衰え、亦常なるべからず。予往に秀の魏塘の王文政の家に在り。吳儂の野を望むに、茅屋の炊煙、無窮無極にして、皆佃戸なり。一農耕すべき、今田三十畝。仮に畝收米三石或いは二石の如き、姑く二石を以て中と為す。畝一石を以て主家に還すに、庄の幹は石五以上に量る。且く主に三十石を納め、佃戸自ら三十石を得と曰わば、五口の家、人日に一升を食し、一年に十八石を食し、十二石の余有り。予見る、佃戸米を携え、或いは一斗、或いは五・七・三・四升もて、其の肆に至り、香燭・紙馬・油塩・醬醢・漿粉・麩麵・椒薑・菜餌の属に易うること一ならず、皆米を以て之に準う。

佃戸は三十畝の田を耕作して一家五人の糊口を養った。この話は農業の先進地帯にあたる秀の魏塘(浙江省嘉興市嘉善県)の辺りのことである。瞿霆堯が日用の資として寄付した二頃の田を佃戸に請負わせたとすれば、二百石の歳入があり、三十三人の雲水の生活費に充当することができる。自給自足を原則とする禅院という点から、修行者が耕作に従事したとすると、一畝ごとに二石の収獲がすべて大覺寺に入るから、六十六人の修行者の日用の資にあてることができる。現に大覺寺には常時数十百人の修行者がいた。きりつめた禅院の生活は百人に近い修行者をも収容を可能

にしたのであろう。

いったい、二百七十頃の田を寺に施入することを可能にした瞿舜発はどれくらいの田を所有したのであろうか。

松江下砂場の瞿舜発は、嘗て両浙運使と爲る。延祐の間、松江府を以て、撥めて嘉興路に属さしむ。田を括し役を定めて榜示し、其の家の出は上戸に等す。役に当るの民田二千七百頃有り、並びに官田を佃し、共に万頃に及ぶ。浙西田有るの家、其の右に出づる者無し。此を多田翁と爲すべし（『山居新語』）。

瞿舜発は二千七百頃の民田を所有し、その上に官田をも承佃し、都合一万頃に及んだ。官田を勝手に寺に寄進するわけにいかないから、民田の所有からすると^所を寄進したことになる。さきの富民の歳入が二十万石の所有田は、二千頃ということになるから、それよりも七百頃多いという計算になり、『山居新語』に多田翁というのは尤もなことである。なお、子の瞿時学のとき田土を包隠していると訴えられているが、訴えが却下されている。このことから、瞿氏の大土地所有が子に継承されていることがわかる。この瞿時学もさきに見たように中峰に大覚寺に住するよう要請している。

次に、元代きつての文人とされる趙孟頫は、仁宗から高く評価されている。

帝嘗て侍臣と文学の士を論じ、孟頫を以て唐の李白・宋の蘇子瞻に比す。又嘗て称すらく、孟頫操履純正、博学多聞にして、書画絶倫、旁ら仏老の旨に通じ、皆人及ばざる所と（『元史』卷一七二、趙孟頫伝）。

この万能ぶりをみると六朝の士大夫を想起する。どれかに偏らないのが六朝の場合は尊重された。ただ趙孟頫の場合は、文学・書画・道教といったものよりもより禅に対する思い入れが強いようである。「為趙承旨孟頫對靈小参」

（『中峰広録』卷二）に次のようにいう。

某記すらく、大德甲辰歳首、公賢夫婦武林の官舎に相延くを蒙る。丁未秋、公を雪城の新第に訪う。至大戊申復た西湖に会す。明年己酉、再び松雪齋に会す。凡そ一たびの会聚と夫の尺書の往復と、未だ嘗て本来具足の道、未

だ悟らず未だ明らめざるを以て急務と為さずんばあらず。毎に論じ真切の処に到至すれば、悲泣し涕を垂れ、自ら已む能わず。此蓋し真情自り出づ。……其れ仏の境界、松雪斎と、即かず離れず、異無く別無し。

松雪居士趙孟頫は真に参究し実悟を求めており、仏の境界と寸分も違わないものとなった。

鄭雲翼は、大徳五年（一二三〇）江南行御史台下、察院の監察御史であり、さきにみたように至大三年（一二三二）の時点では兗州西廉訪司事であり、延祐二年（一二三三）には江南行御史台都事、最後には兵部尚書となった。中峰が鄭廉訪に示した法語（『中峰広録』巻五下）の中に次の一つがある。

学道に三要有り。第一に生死の大事の爲の心切なるを要す。第二に世間の虚妄浮幻榮辱得失等の相を識破せんことを要す。第三に一片の長遠決定の心を弁じ永く退転せざらんことを要す。此の三要、苟し其の一を欠けば則ち廃し、其の二を欠けば則ち失す。三者俱に欠けば、縦使たとへ三蔵の教に背通し深く五車の書を読むとも、惟だ業識に資し、謾りに高心を長じ、殊に己が躬を補う所無し。

学道の三要をとき、生死の一大事を明らかにすること、世間の虚妄といった姿を看破すること、決定の心を弁じて退転しないことの三要である。

彝菴居士蔣均は大同菴が完成すると、水が乏しくして典座が諸鄰に汲むというその労を見かねて門の東に井戸を掘らせ、西来井といった（『中峰広録』巻二三、西来井泉銘）。中峰は彝菴居士に示した法語（『中峰広録』巻五下）の中で次のように説く。

禅とは何物ぞ、乃ち吾が心の名なり。心とは何物ぞ、即ち吾が禅の体なり。達磨西来し、只だ直指人心を説くのみ。初めより謂う所の禅無し。蓋し直指の下に、悟入する所有り。

禅というのは心の名であり、心というのは禅の本質だとする。

世祖クビライ・カーンは三たびわが国に襲来しようとする意欲をもっていたが、実行にうつすことはできなかった。

それは一つには元朝の食糧を賄う重要地点である江南において人民の反乱があったこと、もう一つは、前駆となる筈の元朝の重臣下における高麗の人民の反乱が頻発したこと、それにアリクブカの乱、海都の乱等々によって日本への第三回目の軍事行動を決行することができなかった。元朝宗室の一員である高麗国王の世子は大都で人質的に留まらざるを得なく、中峰に師事した瀋王王璋も例外ではありえなかった。瀋王の場合は国王（忠宣王）となってからも大都に留まっている。瀋王は大徳九年（一二〇五）大都の慶寿寺に大藏經を施入し、時の住持は西雲子安であった（『程雪樓文集』巻一八、大慶寿寺大藏經碑）。彼は、また越（浙江省紹興市）の飛來山宝林寺にも大藏經を架蔵している（『金華黄文集』巻一二、宝林華嚴教寺記）。これらの大藏經は当然高麗版であろう。なお慶寿寺は元来、万松行秀と並び称される海雲印簡の住したところとして知られ、宝林寺は清涼澄観が出家した寺として知られる。瀋王は西雲の上足、北溪智延に師事しているようである（『金華黄文集』巻四一、北溪延公塔銘）。瀋王が禅へと心を傾けていったのは、皇慶二年（一二三三）第二子忠肅王に高麗国王位を譲ってから以後のことであろう。もちろんそれまでに西雲や北溪に師事したという前提があつたのことと思われる。事大派と独立派に翻弄され政治に対する意欲を失った時、当時の碩学グループと交流をもった。その中の一人に趙孟頫がいた。藤島氏も説かれるごとく趙孟頫を通して中峰の存在を知った。

海印居士王璋が中峰にあてた書簡（『中峰広録』巻六）に次のようにある。

弟子太尉瀋王王璋、頓首百拜し、天目中峰和尚大禪師の座下に和南す。惟うに璋眇徳にして、叨に天嫺に預かる。爵禄榮と雖も、常に仏化に遵う。靈山の付嘱を仰ぎ、覺樹の潜輝を懷う。毎に真容に対して、誠に瞻恋を切にす。勝事を修崇し、教乗を演ぶるを聴くに至っては、頗る嘗て及ぶ。而も禅宗向上の一著、所趣を知る罔し。伏して審らかにするに、吾が師、道は天目に伝え、名は帝心に簡ばる。良に江山迢遙として、尚お執待を阻むを以て、醍醐を渴仰し、化雨に霑わんことを思い、極めて懸懸たり。緬かに想う、天人叶賛し、法侯常に勝らんことを。今専ら

洪鑰を遣わし、謹んで信香を齎し、礼敬を伸ぶるに代う。久しく和尚高を泉石に養い、他方多く住持を請うも、曾て未だ垂諾せざるに嚮う。無相の法身隠さんと欲して弥々露わるるを奈んせん。曷ぞ出世度生して広く利益を開くには若かん。然れども江南の靈蹤聖境を聞き、久しく遊観せんと欲す。秋冬の間、儻し旨を得て南来せば、首めに当に参扣すべし。願わくは悲済を興し、先ず此に区区を布かんことを。幸いに法照を祈めん。

藩王は従来、教学的仏教は少しく聴いてはいるが、禅宗の向上の一路、つまり悟りの境地にいたることについては、知るよしもないという。そこで、禅の法門を聴きたいということである。これに対して中峰が「藩王に答うるの書」(『中峰広録』巻六)の中で、禅門の向上向下というのは一時の建立の方便であって、巧みな言葉で実有ではないとする。大事なものは、信根が猛利であって決定して退転しないことで、そのことによって悟入しないものはいないとする。官寺に入院しない点については、正しく自らを救うのに手一杯でひまがないから退遁するのだとする。これは狭い意味の自利ということではなく、あくまでも自己を掘り下げていこうとする求道心からきている。

ところで、武宗擁立に功績のあった忠宣王は瀋陽王に封ぜられ、のち瀋王と改められた。絶頂期の瀋王には尊大な振舞もあった。延祐の初め(一二三四)彼は補陀山の観音に参拝するため杭州に立ち寄った際に、明慶寺で斎会を行ない、諸山の住持にお斎を出した。瀋王それに官僚達は上座をしめたのに対し、下天竺寺の鳳山子儀は主賓の座位を正したという(『山菴雜録』巻上)。この話は彼の得意な時期を過ぎても、その尊大さが名残を留めていることを現すものといえよう。奉仏家の彼が、まさか布施の在り方を忘れてしまったわけではないであろう。

次に、江漸行省丞相脱歓は、答剌罕順徳王つまり哈刺哈孫の子であり、行宣政院事を兼任し、江南の仏教界を統括した(『笑隱大訥語録』巻四、行道記)。彼は笑隱大訥・曇芳守忠・天岸弘濟・東嶼徳海・竹泉法林・無印大証等に官寺の住持となるよう要請している。なお、哈刺哈孫は成宗のときの名宰相として知られる。

主一居士敬嚴は性命の学、すなわち宋学を体究した人である。中峰は彼を「四大分散の時、何の処に向て安身立命

す」という公案で導いている(『中峰広録』卷五上、示主一居士)。

虞集の撰した「塔銘」(『中峰広録』卷三〇)に見える行省丞相の別不花（ハク）や行宣政院史の張間も中峰に敬服した。容齋居士別不花に示した法語(『中峰広録』卷五上)に次のようにいう。

心は妙悟にあらざれば知ること莫く、情の尽きるにあらざれば了せず、情は工夫にあらざれば忘ずる莫く、工夫は正信にあらざれば立たず。蓋し学道は正道を以て根本と為す。信と謂うは何ぞや。最初に自心是仏、惟仏即心、曠大却より来、本来成就す、今更に別に再成を仮らずと信ぜんことを要す。靈山の密付、此を付し、少室の单伝、此を伝う。古今の挙揚、此を挙揚するなり。

このあと香嚴擊竹の話や張無尽居士が仕宦中の参禅の様子等についての長口舌が続く。

馮子振は中峰の「行録」「塔銘」「道行碑」には、その名を見いだせないが、中峰と密接な交流をもった。彼は海粟居士と号し、攸州(湖南省株洲市攸県)の人で、内典も外典も目を通さないものはなかった。最初、趙孟頫が中峰を本師と称しているのに対し烈しく責めたてた。ところが、自分も中峰に出会ったと屈膝することになる(『西天目祖山志』卷三)。わが国で珍重される中国の書画は、必ずしも一流とはいえないようであるが、彼の場合は、「遺墨の出づれば、争いて重貨を以て之を購ひ、或いは之を案石に刻し、或いは諸を名山に蔵す。往々之有れば、則ち人の宝と爲る」(『宋学士文集』卷二五、題馮子振庸賦後)とあり、当時の人々からも珍重されたさまが窺える。

このほか、『中峰広録』に見えるいく人かを拾ってみると、同菴居士といわれる般刺脱因は、院使とあることからすると、行宣政院使であったとみてよいであろう。

一切の仏法は、是れ自心に具足す。心外に別に仏法の求むべき無し。縦使たとい求め得るも、亦諦当にあらず。皆是れ妄想情識にして、究竟の法にあらず(卷五、示同菴居士)。

あらゆる仏法が自心に具わっている。これを徹見するため、四大分散の公案に参ずることを説く。

中峰は各地に幻住菴を結んだが、大徳四年（一三〇〇）呉中に遊んだ際に、閩門の西の鴈蕩に茅を結び棲むようになった。その地、松岡教敵を施入したのは陸徳潤である。禅者が踵して至り、わずかに半年で百人となり、三年にわたりここに住した。この幻住菴で絶際永中は中峰を助けて菴務を董した（卷二二、平江幻住菴記）。

『西天目祖山志』卷三にその名の見える鄭思肖（一二四一—一三二八）は、元初の隠士として有名である。福州連江の人で、太学上舍生から博学宏詞科に応じた。モンゴル軍の南下に際し上書したが、報ぜられなく、呉下（蘇州）に仮すまいした。趙孟頫の才名は当世に重んぜられていたが、彼は趙孟頫が宋の宗室であって元の招聘に応じたことを悪んで、絶交している。

天目の本中峰は、禅林の白眉なり。公の名を聞き、見えんと欲するも未だ果さず。偶々孝子梅応堯が家に会い、一見して、各々黙して語らず。坐すること久しくして、本忽ち云う、所南、何ぞ説法せざる。公曰く、両眼は両眼に對す、法の説くべき無し。別れ去るに及んで、本又云う、博学の老子。公即ち曰う、世法の和尚（『所南文集』附、鄭所南小伝）。

このように中峰が鄭思肖に思いがけなくとはいえ相見することができたのは、仏教を信奉していた（『遂昌雜錄』）ということからだけではなく、五山に住することなく幻住菴に住するという中峰の生き方が鄭思肖に共感を呼んだからであろう。

以上で、中峰と居士との関係、居士の動向についてみた。藤島氏がまったく知る手立てがないとされ、筆者もまったく知り得なかったもの（陳子騫）も残ったが、少しは付け加えることのできたところもあった。

次に、中峰が各地に結んだ幻住菴や師子院の運営はどのようなになっていたか、少しく見てみたい。

四 幻住菴・師子院の運営

中峰は平江路鴈蕩の幻住菴、湖州弁山の幻住菴、平江路の順心菴、丹陽の大同菴、吳江州太湖簡村の順心菴、師子岩東岡の幻住菴等に住した。このうち、平江の幻住菴は、さきに見たように大徳四年に土地の人である陸徳潤が、鴈蕩の松林数畝を施入することになったものである。この幻住菴の勸縁の疏（五島美術館蔵、芳賀幸四郎『墨蹟大観』二巻28）が現存する。

吳門幻住庵

庵狝于大徳庚子年雖

未遠而椽栢為蠹魚所

壞凛々將厭茲欲厨

屋併而新之所費伏

好事英檀不吝施力揮

金成就則

福田亦相須而速矣敬為

説偈以勸

幻相元非住家風

豈可虧庖厨今

樹立中屋要増

輝惟憑

吳門の幻住庵

庵は大徳庚子に狝む。年末だ

遠からざると雖も、而も椽栢蠹魚の壞る

所と為り、凛々として將に圧せんとす。茲に

厨屋併せて之を新たにせんと欲す。費やす所は、

伏して好事の英檀、施力・揮金を吝しまざれ。

成就せば則ち

福田も亦相須^{まよ}つて速かん。敬しく説偈

を為して以て勸む。

幻相元住に非ず、

家風豈虧くべけんや。

包厨今樹立し、

中屋輝きを増さんと要^{ほつ}す。

檀度力為展道

人機併新

成就了枯坐政

相亘

今日 日 疏

幹縁

守庵沙門

勸縁依而住菩薩

惟だ檀度の力を憑み、

道人の機を展べんが為のみ。

併せて新たに成就し了らば、

枯坐政に相亘しからん。

今日 日 疏す。

幹縁

守庵沙門

勸縁依而住菩薩

呉門というのは、現在の江蘇省蘇州市、元では平江路といい、宋では平江府、唐代では蘇州といった。この呉門の幻住菴は、創建からあまりたっていないのに垂木や庇が木くい虫に侵食され倒壊しそうになっており、これを修繕したいのと、同時に庫裏を新しく建てたいというのが中峰の願いであった。かくて奉加帳が回されることになる。田山方南氏はこの勸縁の疏を晩年の延祐末から至治にかけての事とされる（『禅林墨蹟』解説62）。庵の開基にあたる陸徳潤は地主と思われるが、中峰の晩年の頃には勢力を失っていたのであろうか、あるいはとても一人の負担では耐え得なかったのであらうか。ともかく中峰のもとに集まってくる修行者のために伽藍を整備することになり勸進帳が有縁の檀越のもとに回された。

中峰が菴以外で少しは寺らしいところに住したのは、唯一師子院である。師子院は直翁居士洪喬祖（於潜の人）が高峰原妙のために開創したものであり、高峰は亡くなるに際し甲乙利として寺を規定している。しかし高峰滅後十七年堂塔は倒壊に瀕していた。

至大辛亥、棟宇は嵐蒸霧蝕を以て、懔懔として將に圧せんとす。上首の弟子了義は、大いに化縁を鳴し、首め僧

堂を建て、明年宣明室を恢拓す。越ゆること二年、延祐甲寅、庫院・行堂・大室を更新す。又二年丁巳、円通殿を徹し閣と爲し、上は聖像を崇^たし、下は法堂を敝^ひくす。香積海を東隅に鼎構し、梅檀林を西極に増置す。惟だ山門・仏閣・方丈のみは、余の力を尽して、之を併新す（『西天目祖山志』卷四、元学士趙孟頫敕建西天目山獅子正宗禪寺碑記）。

高峰の上首の弟子である断崖了義は、師子院の復興に力を尽し、あと伽藍で残っている山門・仏閣・方丈のみを中峰が營建することになる。それは疾病もいえた延祐五年（一三一八）から至治二年（一三二二）にかけてのことに属すると思われる。なお、「中峰行録」には、中峰が天目山に還った歳（延祐五年）に、仁宗は師子禪院を師子正宗禪寺とし、趙孟頫に寺碑を撰述させているとする。しかし、実際に寺碑が書かれたのは、山門・仏閣・方丈が重修されてからのことに属するであろう。

堂塔伽藍の整備は、中峰にとって大変な心労であった。わが国に将来され現存する書翰（芳賀幸四郎『墨蹟大観』一卷53）はその間の事情をよく伝えている。

明本事を記して再拝して、福寿堂上山翁和尚の尊几に上る。明本一節衰病を以て、竟に世用を為すこと能わず。一箋尊安の間を致すこと難く、動もすれば疎闊を成す。即日秋高し。伏して惟みるに、桂花香裏し、皓月輝きを呈す。是の如きの境中、跏趺宴坐し、身心を動ぜず、是の如きの福を納る。明本日に、以中大いに土木を三塔に興すが為に、大いに施鑰を開くことを荷う。今已に事を祖塔に集し、亦弁事の間に在り。惟うに是れ厨屋・行堂は、今月十四・廿七の二吉辰を取って起架せんとす。人匠駢集し、食指繁多にして、支費政に艱難の秋に在り。昨衆檀相公の許を荷うこと、七月末の勾^こに在り。旧の首尾百定し、三百石の白米を支与さるるに及べば、同時に事を集^なす。去年以中時に乗ずるを失うが為に、是に於て蹉過す。今年の以中、又爾の身を抽んで、山中より出でずして起架す。若し是れ他の躬^{みづか}自ら砥^ただ分つにあらざれば、則ち成就せず。今専ら良道をして其の走を代らしむ。檀相上項新旧の

錢米を支給せば、以て諸務の粉を憑解せん。又聞くならく、断事の相公の次第、杭の興に如く有りと。是に於て急ぐに其をして走らしむ。就いて尊知に乞うらくは、有する所の三塔記一本、率易に奉納す。幸いに過目し以て之に印せんことを。区々懷有り、以て面閲を俟つ。伏して丐う、尊悉不備。明本 事を記し再拜して上る。

八月初九日謹空

如し慈悲を吝まず、始終勸請を蒙らば、則ち幸い莫大なり。

この尺牘の文面からすると、さきの師子院の山門・仏閣・方丈を重修する際の苦勞を述べたものである。ただし、山翁和尚あての書翰中の三塔について、芳賀氏は何々をさすか明らかでないと言れるが、文中の祖塔・厨屋・行堂のようである。ところが厨屋（庫院）・行堂については、既に兄弟ひんていの断崖了義により重修されてしまっている。すると、同じ天目山中にある大覚寺に関する方をさすのであろうか。しかし、大覚寺の方は、再三にわたる晋山要請を中峰は辞退し、代わりを住持に推挙している。住持でもないのにこれほどまでに費用の調達に苦勞するであろうか、そうとは思われない。天目山師子院の事としなければならないが、趙孟頫の碑記の記載に錯綜があるのであろうか。

書翰中の相公というのは、行中書省の宰相という意味であろう。中書省下の断事官（札魯忽赤ジャルグチ）は各地に派遣されて錢穀をも理算したが、ここは断事の相公と、相公が下についているから、行中書省の錢穀を担当する宰相という意味であろう。堂頭和尚となつて院事を領することは経済的にも大変な心勞を伴つた。中峰の時に寺額を受けて元朝公認の寺院の仲間入りをしたとはいへ、甲乙院だから五山派の官立寺院のように大々的に国庫の支援を受けることはなく、住持の才覚に左右されたであろう。徹底して己自を究明することにかけては元代随一の中峰も、諸堂の整備には悲鳴をあげている様子がよくわかる。

おわりに

元代の禅界にあつて第一人者といえる中峰は、高峰のみに師事して、悟後にあつては五山派の官寺に出世することを選び徹底して己自を究明しようとした。高峰・中峰と継承された菴居にあつて修行するという形態は弟子達にも受け継がれた。この中峰の法系は後世まで続き、明末の隠元隆琦も、その法系に属する。臨済宗の中で近代にまで法系が栄えたのは破庵派下の中峰の門流、すなわち幻住派のみである。中峰は江蘇省・浙江省を中心に菴居、あるいは船居した。菴の外護者として陳子聡・蔣均・陸徳潤等があり、彼らは瞿曇発のような大土地所有者とはいえないまでも地主階級に属したとみて大過ないであろう。誰が外護者か分からない菴でも、その建立・維持には、無名の地主や、そして自作農、さらに佃戸の支持もあつたことであろう。このような人々に募財の奉加帳が回されたと思われる。

彼の教えを受けた瞿曇発をはじめとする居士たちは、藤島氏も考察されたごとくモンゴル人・色目人・漢人・南人の四階層を含み、あたかも元朝支配体制の縮図の観を呈している。居士達は江浙行省丞相、あるいは行宣政院使となつて杭州に赴任することによつて、これをきつかけとし中峰と親交を結ぶようになった。これらの居士達を向上心、信、生死といった問題から導いている。さまざまな階級・階層のものが中峰のもとに参禅したことは、多民族国家よりなる元朝において仏教、とりわけ禅が精神的紐帯として重要な役割をもつたことを物語る。生涯、五山派の官寺に住持しなかつたことは、己自究明を標榜するものの、一面において異民族支配下の軍門に降る事を潔しとしない遺民的士大夫の精神と通ずるものがあるろう。元朝の諸天子の中にあつて漢文化にひとしお理解を示したといわれる仁宗が、宣政院使を代りに候謁させようとした時、鎮江に身を避けている。このことは中峰の遺民的性格を表すといえよう。言い換えるならば、方外の士として出家の道を貫いたということにならう。とはいへ、中峰が仁宗から師号や金襴衣を受け、聖節の示衆（『中峰広録』巻上二）を行なつたことは、近世という絶対君主体制下にある歴史的制約を跳ね

返し方外の士としてすべてに節を通すことができなかったことをも表すといえよう。

このような限界はあるものの中峰の現今の国家体制から身を一步も二歩も置いた生き方は、出家教団として近代にまでその法系が続くゆえんであろう。国家権力と交渉をもち癒着した宗派がはかなくも衰微していったことは歴史の教えるところである。弟子達の要請もだしがたく天目山に帰っているときでも、その本拠は幻住菴にあった。その幻住菴から公的な行事に際してのみ師子正宗禪寺に出頭している(『中峰広録』卷一上、示衆)。このように林下としての生き方を貫いている。

元代、東陽徳輝^{ていひ}は勅命により『百丈清規』を重修しており、これを校正したのが笑隠大訢であった。いわゆる『勅修百丈清規』である。これは国家仏教的色彩を強烈にもつ。この『勅修清規』の成立は中峰寂後のことである。これより以前、中峰にも清規があり、『幻住菴清規』という。五山官寺派の『勅修清規』に対し、林下の清規という性格をもつであろう。後日これについては考察してみたい。

最初、この論考を書くにあたりわが国の幻住派まで論及するつもりであった。文永・弘安の役後の中峰のもとには、わが国からの多くの参禅者がいた。日元の交流の一環として、中峰とわが国の門下との関連を捉えて見たいが、これまた後日のこととせざるをえない。そしてまた、中峰といえは、禅淨双修家として名高いが、近世における禅淨双修という流れの中での中峰についても宿題とせざるを得ない。

宋以後の独裁君主体制下にあつて、仏教々団はその傘下にあつてのみ存立を許された。このような時代にあつて、各地に幻住菴を結び、その運営に苦闘しながらも、専一に己事究明しようとする中峰の姿は、東アジアの各地から来つた修道者にとって、何よりの指針であつたろう。彼の真の出家として、国家権力に依拠しない修道方法は、単に中国のみならず東アジアの国々にまで大いなる影響をもたらすことになる。

注

- (1) 宮崎市定「南宋末の賈似道」(『アジア史研究』第二)、田村実造「アリクブカの乱と海都の反乱」(『中国征服王朝の研究』中) 参看。
- (2) 同じ杭州生まれで、二年後輩に天台宗の湛堂性澄がいる(大藏正蔵「元杭州上天竺寺湛堂性澄考」『元代の法制と宗教』所収)。
- (3) 中峰の行状については、野口善敬氏の「天目中峰研究序説」(『中国哲学論集』四号)があるが、話の展開上、私なりに述べる。
- (4) 仰山が甲利であったということは、『扶桑五山記』巻一、大宋諸寺位次による。『所南文集』の「十方禪刹僧堂記」に、五山をはじめとする名刹を列記するなかに仰山もその名が挙っている。わが国への渡来僧、清拙正澄は仰山の虚谷希陵のもとで前堂首座を掌っている(拙稿「日元における清拙正澄の事績」『日本歴史』四三〇号)。
- (5) 「中峰行録」は至元二九年のこととするが、「高峰原妙行状」(『高峰原妙語録』巻下)も、「瞿運使薨卒哭藥師道場對靈小參」(『中峰広録』巻二)も共に至元二八年のこととする。
- (6) 『松雪斎文集』巻末、行状(楊載撰)によると、趙孟頫が杭州にあったのは、大徳三年(一二九〇)から至大二年(一二九〇)までのことである。
- (7) 兪浙西廉訪司事は、『元史』巻八六、百官志、肅政廉訪司の条によると、江南浙西道肅政廉訪司兪事というのが正式な役職であろう。延祐四年(一三一七)呉澄が「擬道山房記」(『国朝文類』巻二九)を書いたときには、鄭雲翼は江南行御史台都事であった。
- (8) 江浙行省丞相が靈隠寺に住持となるように働きかけたのは行宣政院使を兼領していたからである(拙稿「元朝の江南統治における仏教」『仏教史学』一五巻二号)。
- (9) この時は、ちょうど行宣政院が廃止されていた期間にあたる。かくして大都から宣政院使が杭州に派遣された(野上俊静「元の宣政院について」『元史釈老伝の研究』所収)。
- (10) 『天如惟則語録』巻七、跋幻住和尚法語に、「延祐己未の秋、幻住師潘王の命に迫られ、一路の葛藤を引起す。余愚谷と俱に聴列に在り」とある。
- (11) 笑隠大訢の撰述した絶学世誠の塔銘(『蒲室集』巻一二)に、「宋季に慧朗は仰山に居る。法席特に盛んなり。其の門由り出でて大方に抛るもの、固より一時の麟龍なり。其の跡を岩穴に通るものは、高峰・陡厓・鎮牛の若き、亦先徳に追蹤するに足る。後高峰は以て断崖・中峰に伝う。而して鎮牛は、以て絶学に伝う。又皆道は海内に重し。它の宗の及ばざる所なり」とあり、雪岩祖欽下から二つの傾向が出たことを示す。一つは大方、すなわち五山派の官寺に住する流れであり、もう一つは、山林派の足跡を岩穴に通るものである。
- (12) かつて元末に集中して帝師が師号を下賜したことを「元

(13) 末帝師の事績」(『大谷学报』四八巻三号)と題して述べた。
 「文成」(梵) 鷹藏主、大明国に遊ぶを送るの詩并びに序」

『五山文学新集』第一巻、横川景三集)に、「壬子冬、国信使に従い、将に中華に遊ばんとす。予に告げて曰く、吾が祖父大拙能公、商舶に附し重溟に汎ぶ。其の意は幻住国師に参するに在るのみ。実に大元至正年中なり。時に国師化を載む。其の付法の弟子千岩禅師、一見して道合し、国師の衣を以て之に授く。示衆して曰く、中峰和尚の一頂衣、我得來たること三十年。如今祖能首座、日本国裡に帰り、我が宗風を振い、大いに仏事を作さんことを請う。云云と。某今此の行有り」とある。

(14) 『正徳松江府志』巻二八、瞿舜発伝。

(15) たとえば、周藤吉之「宋代浙西地方の畹田の発展」(『宋代史研究』所収)、相田洋「元末の反乱とその背景」(『歴史学研究』三六一号)等に引用する。

(16) 周藤吉之前掲論文参看。植松正氏は「元代江南の豪民朱清・張瑄について」(『東洋史研究』二七巻三号)において、「瞿時学がはたして前の瞿舜発の子孫にあたるものかどうかははっきりしない」とされるが、中峰が「公の子、時学」(『中峰広録』巻二四、観音菩薩瑞相偈序)と記すように、正しく子供である。

(17) 森 三樹三郎「六朝士大夫の精神」(『大阪大学文学部紀要』三巻)参看。

(18) 丸亀金作「元・高麗関係の一齣―瀋王に就いて―」(『青

丘学叢』一八号)、岡田英弘「元の瀋王と遼陽行省」(『朝鮮学報』一四輯)参看。

(19) 江浙行省左丞相の別不花は、一源永寧とも交流をもつ(『宋学士文集』巻三二、寧公碑銘)。

(20) 「吳門重建幻住庵記」(『宋学士文集』巻六九)に、「姑蘇の幻住庵は、元の普応国師中峰和上本公の建立する所なり。国師は既に法を高峰妙公に得たり。唯だ人の知りて其の出世を挽くを恐れ、深く自ら蹈晦し、往きて三吳の間に遊ぶ。大徳庚子、国師三十又八、嘗て閬門の西麓に憩う。松檜蔚然として林を成すを見て、名を居人に問えば、則ち曰う、此れ鴈蕩と。国師喜びて曰く、永嘉に鴈蕩山有り、乃ち応真諾矩羅、下現を示すの所名、之と同じ。其れ般若の当に與すべきや。吳士の陸徳潤は其の言を聞き、遽かに地を以て之を施す。国師草庵を縛すること三間以て居す。趙魏公孟頫為に之を扁して棲雲と曰う。国師其中に跌坐す。而して道を問う者、連翩して来る。五百指の多きに至り、乃ち精舎一区を創せんとす。僧俗功に趣き、三か月ならずして就る。謂う所の堂房門廡咸具わる。乃ち名を国師に請う。国師曰く、澄澄たる水鏡は、能規の幻体、昭昭たる影象は、所現の幻跡なり。幻と幻と尽き、覚と覚と空す。斯れ則ち超悟の極至なり。吾儕此の如幻三昧に依りて住す。宜しく幻住を以て之に名づくべしと。是の時に当り、南詔の無照鑑、西江の定叟泰、荆南の鉄印権、冀北の指堂月の若き、号して一時の麟鳳と為す。咸輪下に集まる。幻住の

名、四方に籍籍たり」とある。絶際永中が白衣観音を描き、それに中峰が賛をした墨蹟が現存する（田山方南『禅林墨蹟拾遺』中国篇¹⁰⁸）。

(2) 田村「元朝札魯忽赤考」（前掲書、所収）参看。